校長室だより～燦燦～ №９７９

世界情勢

2024.2.23

お盆や年末年始になると、長男と長女が都会から帰省してくる。先月は、長男が金曜日の仙台出張のついでに実家に寄ってくれた。彼が戻ってくると、いろいろと勉強になる。「ふるさと納税やった？」「まだやっていないの」と責められる。「ＮＩＳＡはいいよ」このようなことをずっと言われている。だが、いまだに何もしていない。

彼の仕事の話を聞いていると、わずかながら世界情勢が見えてくる。それに対して、学校という狭い社会で生きている自分は、何もわかっていないことを思い知らされる。果たして、これでいいのだろうか。

彼は、生き生きと楽しそうに仕事をしている。職場の人間関係や上司との関係など、気を遣うことも多いことだろう。話を聞くと、そういうこともあるらしい。それでも、仕事そのもののおもしろさが上回っているようである。

東京の中心部のオフィスで、日本はもとより世界の国々を相手に仕事をしているのである。官庁とのやりとりもある。大きなお金を動かすこともある。まだ若いにもかかわらず、仕事のスケールが大きい。

学校の先生は、やりがいのあるすばらしい職業である。それは間違いない。だが、彼の話を聞いていると、取り残されている感を抱いてしまう。焦りにも似た気持ちになる。だからだろうか、以前から池上彰さんの本などを買って世界情勢について勉強をしている。だが、知識が身につかない。すぐに忘れてしまう。やはり、知識は実際に使わないと定着しない。

教員は、世の中のことを知らないと言われても仕方がない。だからこそ、積極的に外の社会に出ていかなければならない。地域社会もそうであろう。保護者と話すだけで見えてくることもある。私は、よく「三人寄れば文殊の知恵」と言っている。一人で考えても思考は進まない。二人でもらちが明かない。だが、三人で考えると、意外といいアイディアが出てくる。こういった経験を何度もしている。ここに、教員以外の方が入れば、さらによくなる。

私たちは、日本という国に、日本人として生きている。地図を見ればわかることだが、日本はまわりを海に囲まれた島国である。陸続きのようには隣国と接していない。そして、細長く小さい。こんな小さな国が、よくも国際社会の中でがんばっているものだと感心してしまう。その一方で、地図を見ていると、心細くなるのも事実である。何かあれば、あっという間に、国家存亡の危機となるような気がしてくる。

長男の話が、私に刺激を与え、考えるきっかけをもたらしてくれている。若者から学ぶことは多い。これからは、今まで以上に世界情勢に目を向けていこうと思う。それが、日本人として責務でもある。自分の国のことを思い、若者が活躍できる社会のことを考えるという、ごくごく当たり前のことをこれからやっていこうと思う。